

最優秀賞

勝負の相手は自分の心

福島県 中島村立滑津小学校六年 鈴木 美夢

「なんで一位なのに泣いているの？」

私は毎年マラソン大会で思うことがある。それは、友達の足の速い子が毎年「一位」なのに泣いていることだ。一位だったらふつう喜んでなみだはながさない。途中からなみだをながしたとしてもうれしなみだだと思う。でもその子はちがった。

「なんで一位なのに泣いているの。」
と、聞いたらその子は

「自分の走りに納得いかなかったのかな。」
と、くやしそうに言っていた。

そんななみだをながしたのは、その子は何事にもちゃんと向き合って取り組んでいるからだと思う。学校でいっしょに過ごしていても、いつも何事にも一生けん命だ。マラソン大会になる前の練習でも、いつも全力で本気で走っていた。手をぬいて走っている姿を私は一度も見ることがない。ベスト記録を

目標に、周りとはなく、自分の「心」と戦っているように見えた。この友達は、「努力して自分に勝とう」とする強い気持ちを持っている。そして私は同じ六年生だけれども、その友達をそんな敬している。この友達と私のちがいは、何だろうか。一番ちがうのは、物事一つ一つと向き合う気持ちだと思う。私の場合マラソン大会では「早く終わればいいのに」とか、「とりあえず走っておけばいいかな」と、マラソンをやらされていた。また、「本気で走ってもおそいし」と思い、走る前からすでにあきらめている自分がいた。しかし、全力で取り組んでいる友達を見ているうちに、少しずつ自分の気持ちが変わっていった。「早く終わればいいのに」や「とりあえず走っておけばいいかな」という気持ちがいっつの間にか消えていったのだ。それからは、足の速い友達に少しでもついていけるように自分なりに精いっ

ぱい追いかけるようになった。そして、「とりあえず走っておけばいいかな」が「同じくらいの速力の子くらいぬかしてやる」という気持ちに変わった。そのとき改めてその友達の本当のすごさに強く気づかされた。速く走るすごさではなく、私のような人の気持ちを変えるすごさだ。

私は、この経験を通して、「自分に負けない気持ちを持って全力で取り組む」という友達の姿に感動させられた。プロのピアノのえんそうや学習発表会の演技を見て感動したことはあったけれども、同じ学年の友達の姿でこんな気持ちを動かされたのは初めてだった。そして、私は今まで感動「させられる」側だったけど、これからは、感動「させる」側になりたいと思った。そのためにこれからは私自身も弱い自分に負けない強い気持ちを持って何事にも取り組んでいく。そして、感動「する」だけではなく一人でもいいから人の心を感動「させる」人になりたい。

